

# 刈谷城跡発掘調査現地説明会

平成21年11月28日（土）午前10時～  
刈谷市教育委員会 文化振興課

## 1 刈谷城について

刈谷城は天文2年（1533）に水野氏が金ヶ小路のほとりに築城した。もとの刈谷城は当地より約1.2km南東にあったが手狭になったという理由で移転・新築した。新しく刈谷城が移ったことにより、それまでの城があったところを元刈谷と呼ぶようになった。この新城の築城について、これまでは『寛政重修諸家譜』の記述により水野忠政の築城としていたが、同時期に水野忠政が刈谷を支配していた痕跡がなく、逆に刈谷を治めていたのは水野近守・守忠の名前が見られることから、刈谷城築城は水野近守か守忠によるもので、どちらかは不明であるため水野氏の築城としている。刈谷藩になってからは、水野勝成を初代藩主として、9家22人の藩主によって治められた。

刈谷城の絵図は幾種か存在するが、その1つには本丸の4隅に櫓が描かれたものがある。しかし、現物の絵図が確認できず、4つの櫓について確証を得ることはできないが、場合によっては、桶狭間の戦い後に火を放たれたという記述もあるので、焼失した可能性もある。江戸時代になると、北西と南東の隅に2層の櫓があったことは各城絵図に描かれている（図1）。本丸の東側には腰郭があり、堀をはさんで二の丸へと続く。本丸が西の端で東の方に広がる形で城下町が形成されていった。2箇所にあった隅櫓も江戸時代中期には壊れてしまい撤去された。

明治4年の廃藩置県後、刈谷城は政府の所有となり、城郭建築は入札によって払い下げが行われ取り壊された。その後は大正2年に大野介蔵に売却され、旧城跡を永久に保存することになった。昭和11年に刈谷町から旧城跡を公園にしたいと意見書が出され、町に売り渡され、翌年には亀城公園となった。

## 2 発掘調査について

今回の発掘調査は、刈谷城にかつて存在した櫓や城門・石垣等の遺構の残存状況を確認することを目的とした初めての本格的な発掘調査であった。幅1mの調査トレンチを本丸南西部（表門から裏門にかかる範囲）に9か所、本丸北東部から南西部にかけて残る土塁の北東隅と南西隅に各1か所設定し（図2）調査を行ったが、石垣や隅櫓の痕跡を確認することはできなかった。

本丸南東側は廃城後の石垣撤去の際に裏込め・掘り方ごと掘削・破壊され、遺構として残存していない可能性が高い。第1トレンチ上段などで見られた昭和期の攪乱は公園造成をはじめとする度重なる改変の一端を示すものであろう。本丸周囲の土塁については比較的良好に盛土が残存しているが、土塁上に土塀や隅櫓等の遺構は確認できなかった。戦時中には高射砲陣地となるなど、土塁の上部も長年の間に風雨にさらされたり人為的な削平を受けたりして少なからず後世の影響を受けているものと思われる。

ただそのような中、第1トレンチ上段・第5トレンチ上段で建物基礎とみられる遺構を検出した（写真1・5）。両トレンチで確認した建物礎石・基礎はごく部分的であるためその建物配置や規模も分からないが、今後調査範囲を周囲に広げ、今回のような幅狭のトレンチ調査でなくある程度平面的な発掘調査を計画・実施することで、本丸の表門あるいは裏門か、それに付随する何らかの建物の基礎であるかどうか明らかになってくるだろう。

また、第2トレンチ上段から第4トレンチにかけて確認した礫層や盛土の堆積状況は、本丸造成時の土木工事の一端や石垣に並行する建物施設（多間櫓？）の可能性を示し（写真2～4）、第5トレンチ下段で検出した列石についても裏門から腰郭にかけての区画を示す可能性があり（写真8）、これらもある程度の平面調査と深掘りによって今後さらに詳細に調査していく必要がある。

出土遺物の大部分は瓦で、第2トレンチ下段と第5トレンチ下段では土井家の家紋（八つ柄杓水車）入りの軒丸瓦の破片が出土した（写真11）。その他の瓦もほとんどが江戸後期のもので、築城当時のものや江戸中期以前にさかのぼるものは見つかっていない。

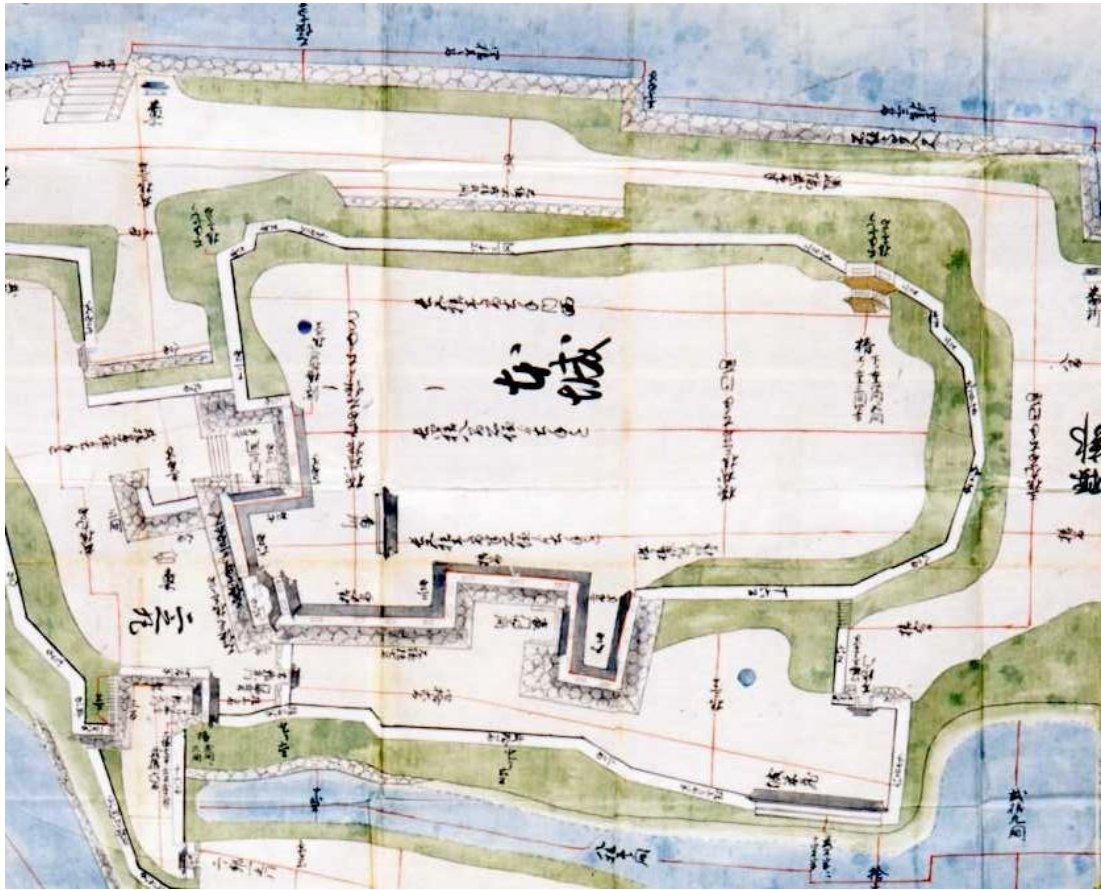


図1 刈谷城絵図（本丸部分 江戸中期）

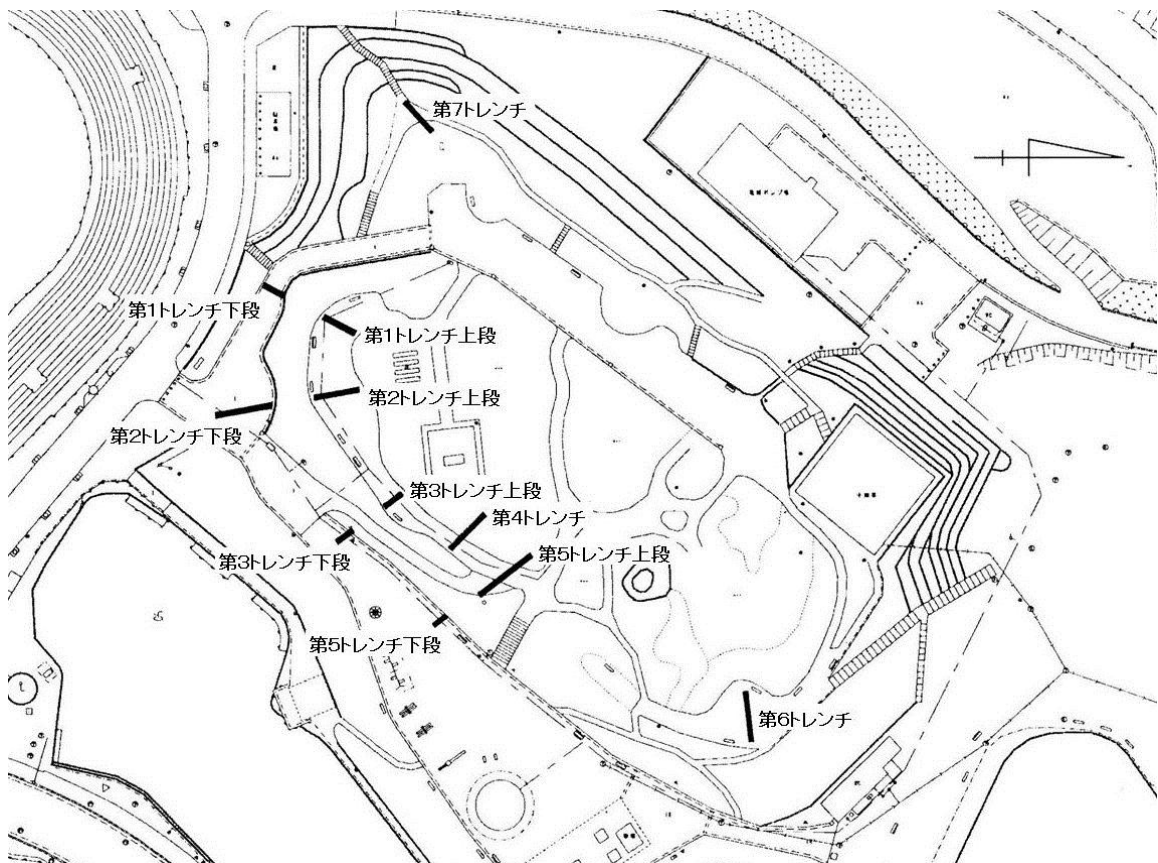


図2 調査トレンチ位置図



写真1 第1トレンチ上段 建物の礎石



写真2 第2トレンチ上段 人工的な盛土



写真3 第3トレンチ上段 溝状の堆積を示す礫層



写真4 第4トレンチ 礫層



写真5 第5トレンチ上段 建物基礎列



写真6 第6トレンチ 瓦組遺構(昭和期)



写真7 第7トレンチ 土塁の盛土



写真8 第5トレンチ下段 礫層端部の列石



写真9 第3トレンチ下段



写真10 第2トレンチ下段



写真11 第2トレンチ下段出土  
土井家家紋入り軒丸瓦 (左)



写真12 第1トレンチ下段